

子どもの表現を導く音楽指導について — 5歳児を対象としたリズム活動の一考察 —

岡田 泰子¹⁾

Music Instruction to Lead the Expression of the Child Rhythm Activity for 5 Years Old Children

Yasuko OKADA

キーワード：保育・音楽・子ども・表現・ミュージックベル

I. はじめに

保育現場における表現活動は、日常生活場面のみならず、運動会や生活発表会など年中行事においても多岐に渡って展開されている。2018年度より幼稚園教育要領、保育所保育指針および幼保連携型認定こども園教育・保育要領が改訂された。三法令はいずれも表現に関しては、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」とある。筆者は15年以上保育園、幼稚園など乳幼児を対象とした保育現場で、音楽あそびに携わっている。そこで、5歳児を対象とした音楽あそびの実践の現状を報告するとともに、三法令に基づく音楽指導の課題を明らかにすることとした。

II. 音楽あそびの現状

① 音楽あそびの目的

保育現場での音楽あそびにおいて、三法令の表現に関する「ねらい」に、(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。とある。また「内容」には、(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。とある。本実践ではこの2点に力点をおいた音楽あそびを展開する。また、子どもたちが体験する過程で、上記同様に「内容の取り扱い」にある(2)子

どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、保育士等はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにする。とある。このことにも留意しながら、音楽指導にあたることとした。

今回は、音楽あそび6回分の実践とその成果について述べる。具体的な内容は、ミュージックベルを介した子どもの表現を導く実践である。ミュージックベルは音楽の三要素である、メロディー、リズム、ハーモニーを全て満たすことが期待できると考える。また、子どもの自己表現とともに、他者との協働活動から一つの楽曲を奏でることの可能な教育的楽器であると考え。また、軽量で扱いやすいことから対象者に適した楽器であると思われる。

そこで、ミュージックベルの実践を通して、音楽あそびの現状と音楽指導の課題を明らかにすることとした。

② 音楽あそびの方法

対象者：T保育園 5歳児33名

期間：2017年4月17日から7月10日まで。

手続き：音楽あそび(1クラス33名)で実施。ミュージックベルを用いたリズム活動として6回分(30分×6)である。

内容：季節のうた「ちゅうりっぷ」「こいのぼり」「かえるのうた」「きらきらぼし」の楽曲についてド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、高いド

1) 短期大学部幼児教育学科

7音を役割分担し、子ども一人1音担当する(4曲とも同音)。同音を担当する子ども数は4~5名。また園内での七夕ミニコンサートで発表する。

Ⅲ. 実践内容と結果

第1回目は、ミュージックベルに触れ、音を出す喜びや、様々な音の高さ(音階)に親しむことねらいとして展開した。

現在までに、園ではミュージックベルを5歳児で経験し、園内で演奏発表の場の機会を設けてきた。今回対象者の5歳児も、ミュージックベルの楽器を「聴く」「観る」という間接的な鑑賞の経験があった。実際初めてミュージックベルに触れた子どもたちは、手首や身体の振動により、クラッパー(ベル本体の中にある振り子)部分が揺れ動き、キャストイング(ベル本体)部分に接触し、音が発することを容易に理解する様子がうかがえた。過去の鑑賞経験は、楽器の持ち方や音の出し方など技術的なイメージを子ども達は理解していたのではないかと推測された。また、手首を動かし続けることは、音が継続すること、手首の動かすスピードを変化させると、音の強弱が変化することなど、表現を工夫し、楽しみながら奏法を習得する姿が見られた。また、一人1音ずつ異なる音高のミュージックベルを持って鳴らすことは、他者の音を聴くこと機会を得ることと捉える。その音色の違いに気づき、単音楽器の特徴も同時に理解する様子がうかがえた。また、子どもたちが、集団で音を出すことにより、ダイナミックな迫力ある音が創り出されることや、キャストイングを胸につけ、クラッパーの動きを静止させることで、静けさを創ることに繋がることも実感し、ミュージックベルを通して表現する可能性の広がりを感じ

ていたと思われた。ミュージックベルは、完全楽器であり、不完全楽器(鈴・カスタンネット・タンブリンのような音楽の三要素の一部を特化した楽器)では味わうことの難しい様々な音高が存在する。その音域は5歳児の声域とほぼ一致することから、発達に相応しい楽器であると考えた。また子ども自身が単音として音を出す喜びを感じ、他者が担当する音高の違う音へも耳を傾け、様々な音に触れることが、表現することへの興味関心の広がり導くのではないかと推測される。その一方で、一人では演奏不可能である楽器の特徴が、チームワークという集団ならではの仲間意識の育ちも期待できるのではないかと推察した。

次に、使用音を低音から音階順に左から右へ並ぶことを試みた。同音を持つ4~5名の子どもたちは、チームとして同音の響きの共鳴を味わい、集団演奏に触発されながら、自分の音を確認する場としても環境設定が構成されたと推測された。更に、音階順に並び、1オクターブの音階進行を指揮者(筆者)の指揮に合わせることを試みた。子どもたちは、自身の持つ1音が、音階の中での位置づけがあることに気づき、技術的には音を「鳴らす」こと「止める」こと、また「聴く」こと「見る」こと「待つ」こと等を瞬時に言いながら、身体を反応させる姿として捉えられると考えた。その姿はミュージックベルに通して集中力が高まり、子ども自身の持つ音が集団の中での役割であることへの気づきの場であるのではないかと推察した。また、音階順に並ぶことは、音の高低の経緯がより認知され易くなり、音程の動きや、音の繋がりも意識化出来たのではないかと推測した。

次にミュージックベルを用い、「ちゅうりっぷ」の楽曲演奏を試みた。音楽指導の過程は以下表1の通りである。

表1 「ちゅうりっぷ」における音楽指導過程

	音楽指導内容	子どもの反応
1	歌唱する	歌い慣れた様子がうかがえた
2	階名唱する	初めての階名唱に挑戦する様子がみられた
3	階名唱と同時に手でリズム打ちをする	階名唱とリズム表現の同時進行に困難な様子がみられた
4	指揮者を見てミュージックベルを演奏	階名唱しながら指揮者に集中する様子がみられた
5	伴奏(ピアノ)に合わせて演奏	音楽の流れに乗り、演奏を楽しむ様子がうかがえた
6	担当音を変えて演奏	集中力が持続する様子がうかがえた

「ちゅうりっぷ」のメロディー使用音は、ド、レ、ミ、ソ、ラの5音である。表1の音楽指導内容1.2.3ではミュージックベルを使用しない過程をふまえた。その理由は、使用しない音を担当する子どもへの配慮とともに、初めての楽曲に触れる機会として、使用音を絞り、「聴く」時間を多くとることは、子どもにとり、ミュージックベルの音色をじっくりと味わうことや、繰り返しの多いフレーズで、リズムのタイミングが掴みやすくなるのではないかと考えたからである。しかしながら、ミュージックベルの特徴として、楽曲により使用する音数が増えることは避けられない現実がある。このことは子ども自身の音の出番数に直結する。今回展開したミュージックベルの導入期においては、このようなシンプルな楽曲が相応しいであろうと考えるが、子どもが楽器に慣れた時期では、楽曲を検討することも必要であろう。今回の使用ベル数が5音であったので、子どもたちはローテーションし、全ての音を担当する機会を設定した。その結果、同じ楽曲でも音が変わることで、リズムのタイミングも全て変化することに気づき、気持ちの新鮮さや楽しさが継続されたように推察した。また、ピアノ伴奏が演奏を支えることによる、ハーモニーの充実感や単音の点であった音がフレーズ感を帯びた線となり、ミュージックベルのメロディーラインと、伴奏ピアノのアンサンブルが成立したことは、より表現力の高い音楽経験になったのではないかと推察される。

終了時には、担任の保育士からは子どもたちに賛辞が称えられ、子どもたちは満足した表情に見受けられた。

第2回目は、ミュージックベルに慣れ、様々なリズムの変化や拍子の違いに親しむことをねらいとして展開した。

この頃になると、子どもたちはミュージックベルへの心得が、以前に増して体得出来ているのではないかと推察した。その理由は、音楽あそびの会場となる遊戯室に、各自がベルを持参し、入室する場面で、子ども一人一人がミュージックベルを胸につけ、音が出ない様に、丁寧に楽器を扱う姿がみられたことや、音階順に並ぶ場面では、同じ音のチームで固まりながら、指示があるまで、ミュージックベルを静かに床に置き、クラス全体の準備が出来るまで待つ姿勢が出来ていると感じたからである。演奏前に

集団として物理的な準備と同時に、他者への配慮も含めて、心理的な準備も整える子どもの姿から、ミュージックベルを通して培うことのできる、協調性の育ちを拝察した。

4月に取り組んだ「ちゅうりっぷ」は4分音符と2分音符からなる4分の4拍子の楽曲である。第2回目の演奏では、その音符の長さの違いが腕や身体の使い分けによって豊かに表現されていたとうかがえた。具体的には、長い音（2分音符）では、足を屈伸しながら下から上へと大きく伸びあがり、腕を充分伸ばし演奏する姿勢がみられ、短い（4分音符）では、シェイク奏法（手首を細やかに動かす）を音の長さのみ行い、その後は速やかにダンプ（音を消す）するタイミングを瞬発力で表現されていたと推察された。また、階名唱もマスターされ、子どもが自信を持って自分の担当音を果たし、誇らしげな様子も見受けられた。演奏中も、前もって音の出番を把握出来ているので、ミュージックベルの振り方が予備運動も含めて拝察された。予備運動が出来るといことは、「呼吸」を意味すると考える。特に予備では「吸う」こと、音が出るところで「吐く」こと、うたを歌うことと同じ感覚を身に付けてきていると考える。ベルの動きに関しては「吸う」場面では上方向に振り上げ、「吐く」場面においては、下方向に振り下ろす動きと言え。ミュージックベルの音をタイミング良く出すためには、曲の全体像を掴み、予備を感じてベルを準備することが必要であると考え。また、リズム感と呼吸が一致することもそれらを可能にすることと推察した。ミュージックベルの特性として、腕の動きをしなやかに使うことが挙げられる。このモーションを活かすことは、脱力感として、重力に従い、呼吸を伴いながら身体を弛緩させること、また、予備運動では、重力に逆らい、息を吸い込み、身体を緊張させるという、「緊張と弛緩」の身体のコントロール（メリハリ）にも通じるのではないだろうか推察された。ミュージックベルは器楽であるが、表現されるものは、歌と同じことが言えるのではないかと推測する。その意味において、選曲に関して、使用音の音数の配慮に加え、子どもが日頃から歌い慣れている、童謡などの親しみある歌曲が適しているのではないかと考えた。馴染みのある曲は、イメージしやすく、自然な呼吸と共に歌えるものであると考える。

次にミュージックベルを用い、「こいのぼり」の楽曲演奏を試みた。音楽指導の過程は以下表2の通りである。

表2 「こいのぼり」における音楽指導過程

	音楽指導内容	子どもの反応
1	歌唱する	季節と一致し、歌い慣れた様子うかがえた
2	階名唱する	細かいリズムの階名唱に挑戦する様子みられた
3	階名唱と同時にリズム確認	自分の音で飛び上がるリズム確認は喜ぶ姿みられた
4	指揮者を見て、ミュージックベルを演奏	階名唱しながら指揮者に集中する様子みられた
5	伴奏（ピアノ）に合わせて演奏	3拍子の流れに乗って音楽を楽しむ様子うかがえた

「こいのぼり」のメロディー使用音は、ド、レ、ミ、ソ、ラ、ド（高）の6音である。「ちゅうりっぷ」の使用音より高いドが1音加わったことで、1オクターブの音域に広がった。加えて、4分の3拍子という、童謡では使用頻度が低い拍子を体験した。この楽曲の特徴としては、リズムに8分音符の速い動きが現れることにある。しかも1小節を除き、1拍目の強拍に頻繁に出現する。8分音符の音は同音もしくは順次進行で現れるが、同音時には、シェイク奏法を使うと4分音符に聞こえてしまう可能性があるため、ここではスタッカート奏法で、1つ1つの音の発音をはっきりとマルカートで表現した。順次進行ではリズムが速いので、流れに乗りにくかったり、音を見逃し、鳴りそびれてしまったりと難しい様子もうかがえた。8分音符のリズムはミュージックベルの演奏においては、スキルアップに必要なハードルがあるのではないかと考える。実際にミュージックベルで8分音符を鳴らす前に、リズムの理解として、音楽指導内容3に示す、リズム反応を試みた。子どもたちは、各々の音のリズムのタイミングでカエルの様に飛び上がり、リズムの理解を促した。実際に飛び上がることで、楽しさを伴いながら、8分音符に必要な瞬発力を意識出来ていたのではないかと推察した。また、飛び上がる動作は積極的動作と考える。子どもたちは自分の存在をアピールするかのよう、意欲的に楽しそうにリズム反応を行っていたように推察された。

音高に関しては、曲の途中で低いドから1オクターブ跳躍して、高いドに移る進行がある。指揮者（筆者）が、オーバーリアクションをしながら、ド

の場所を1オクターブ駆け抜けて表現すると、子どもたちは微笑みを浮かべ、音が飛ぶことを実感し、ベルを鳴らすためには、早めの準備が必要であると意識したよううかがえた。

第3回目は、拍子感の違いを楽しみ、音楽であそぶことをねらいとして展開した。

第2回目までに、「ちゅうりっぷ」と「こいのぼり」の2曲のレパートリーとなったことは、2曲の楽曲の違いが子どもの中で、少しずつ見えてきたのではないかと感ずる。顕著な違いは拍子感である。拍子を決定付けるのは、拍のグループ化と言える、1拍目の強拍がどこであるかを感じず感覚を身に付けることが大切であると思われる。また、それを捉えるには、基礎となる一定の拍感覚を持つことも前提となることも重要な要素であると考えられる。子どもたちは、音楽あそびを通し、3歳児からリトミック活動を経験している（未満児から経験している子どもを含む）。リトミック活動では、基礎リズム（4分



図1 音楽あそびの様子(ポートこぎで拍子感を体験する)

音符、2分音符、8分音符、付点8分音と16分音符)の速度、空間、エネルギーの違いを感じたり、音のダイナミクスや音高の違いを感じたりしながら、協調性、集中力、社会性、判断力、注意力、反応力を育もうと集団で展開してきた。このリズムあそびを通して音楽を身体全体で表現する楽しさ、心地よさ、喜びを得ることは、ミュージックベルの楽器演奏にも反映されることに繋がるのではないかと推察した。拍子感についても同様に、「ちゅうりっぷ」の4分の4拍子と、「こいのぼり」の4分の3拍子では、1小節の拍数が異なり、フレーズのまとまりや、メロディーの順次進行(ちゅうりっぷ)、跳躍進行(こいのぼり)の特徴も、ミュージックベルで表現することにより、目に見える形で掴めているのではないかと推測した。また、音の進行を聴くことにより、ソルフェージュ能力も定着し、音階の位置付けも、子どもたち各々の理解が深まったのではないかと考えた。また、指揮者をみながら、ベルを鳴らすタイミングを予測できる力も集中力が増すことで更に培われたのではないかと推察された。このことから、複数の楽曲のレパートリーを持つことは、音楽の三要素に加え、拍子感や音感、フレーズ感、ニュアンスなど、表現力に直結する要素を導き出すための原点があるのではないかと考察される。それは豊かな感性を育むために、教材の在り方として、有効ではないかと推測する。

第4回目では、ミュージックベルを使いながら、音のコミュニケーションをねらいとして展開した。

季節も梅雨に入り、子どもたちの生活も室内で過ごすことも多い時期である。また、子どもは夏を迎え、虫や生き物、植物など自然を身近に感ずる機会が増えるのもこの時期の特徴なのではないかと推察する。音楽あそびにおいても、室内でも自然の豊かさを感じとり、イメージを膨らませる表現の実践を展開してきた。内容としては、梅雨をテーマにして、天候が変化する様子を童謡「あめふり」を題材に雨が降る表現として、傘を差しながらスキップしたり、雷の音(ピアノで低音を弾く)が聞こえたら立ち止まったりする即時反応を楽しむ様子が伺えた。また、パネルシアターの保育教材を使用し、紫陽花の花を話題に童謡「かたつむり」を手あそびしながら、雨に関連する生き物について興味を持つなど、身近な環境に目を向けながら、表現活動を試みた。中でも「かえるのうた」は鳴き声や飛びはねる動きなど、イメージが捉え易く、模倣あそびに結び付くことも可能と考え、この時期を代表する童謡であると推察される。また、順次進行のみで構成される楽曲であることから、鍵盤ハーモニカの導入に連動できる可能性があると考えられる。

次にミュージックベルを用い、「かえるのうた」の楽曲演奏を試みた。音楽指導の過程は以下表3の通りである。

表3 「かえるのうた」における音楽指導過程

	音楽指導内容	子どもの反応
1	歌唱する	歌と共に、飛び跳ねるなど動きを楽しむ様子がみられた
2	階名唱する	わかり易い階名唱に馴染む様子がみられた
3	階名唱と同時に全身でリズム反応する	階名唱をしながら自分の音でリズムに合わせ、かえるになりきって飛び跳ね、楽しそうに自分の音を確認の様子がみられた
4	指揮者に合わせてミュージックベルを演奏	階名唱しながら指揮者に集中の様子がみられた
5	伴奏(ピアノ)に合わせて演奏	拍感を感じ、音楽の流れに乗って楽しむ様子がうかがえた

「かえるのうた」のメロディー使用音はド、レ、ミ、ファ、ソ、ラの6音である。初めてファの音が登場することで、より音階の意識化に繋がる楽曲であると考えられる。順次進行もメロディーは、ミュージックベルを鳴らすタイミングも視覚的にとり易いせい

か、子どもたちは生き生きと積極的にベルを振り鳴らす様子がうかがえた。また、ファの音が初めて加わったことで、ファを担当する子どもたちは、自分の出番が来たという面持ちで、張り切った様子で嬉しそうに音を出す姿が見られた。また、今までの経

験した2曲の練習の積み重ねも子どもたちの中に浸透し始めた様子で、階名唱に親しみを持ち、担任の先生の示すメロディーの書かれた練習用の楽譜も暗譜が出来た姿がみられ、子どもたちは自信を持って歌い、演奏する様子がうかがえたので、2列に整列し並び方を決め、発表体制をつくった。同時に、1列ずつ演奏し合い、聴いたり、見たりし、お互いを認め合う機会も設けた。子どもたちは、レパートリーが増える毎に、更にミュージックベルでのリズム表現に慣れ、集中しながらも、他者から見られる経験を通して、自分自身に誇りを持つことが、この取り組みから得られることが可能であると推察された。またこの様に、1列ずつで演奏することは人数が制約され、自分の持っている音への責任感が増すことに繋がることも子どもたちの姿からうかがえた。今回は人数の制約を活かした指導に留まったが、「かえるのうた」の特徴である、カノン形式を用い、よりポリフォニックな演奏を試み、ハーモニーの美しさへの気づきや、より複雑な音のコミュニケーションの楽しさを知ることが可能ではないだろうかと振り返った。また、順次進行は音の上行下行がとらえ易く、特に「かえるのうた」のメロディーラインにおいて、上行下行が繰り返されるフレーズにより、自然なクレッシェンドとデクレッシェンドを表現することが容易であり、ニュアンスの変化を

体得するに適した楽曲と捉えることが可能であったのではないかと振り返った。これらは、より多彩な表現力を培う要素であると捉え、今後の検討事項としておく必要があると考える。

第5回目は七夕ミニコンサートの発表体験の準備をふまえ、発表への心構えを持つことをねらいとして展開した。

子どもたちは、この時期には、季節ごとに移り変わりゆく楽曲の流れを体験する中で、様々な曲の魅力に触れ、曲が変わるごとに、同じ音であっても鳴らすタイミングや音の長さも変化し、集中力を保つことも大切であることを感覚的に学んでいる様子うかがえた。また、演奏に至るまでの準備や、演奏後の姿勢などにおいても、ミュージックベルの音が鳴らないように、しっかりとベルを止めておくことや、良い姿勢を保ち美しく立つことも身につけてきて、第3者に見られる準備の意識も高まっているようにうかがえた。また、子ども同士で教え合うことや、演奏に向かう姿勢を注意し合うなど、周囲に配慮する場面も見られ、ミュージックベルを通して、音楽的側面だけでなく、主体性や社会性も得られているのではないかと推察する。

次にミュージックベルを用い、「きらきらぼし」の楽曲演奏を試みた。音楽指導の過程は以下表4の通りである。

表4 「きらきらぼし」における音楽指導過程

	音楽指導内容	子どもの反応
1	階名唱する	歌い慣れた様子うかがえた
2	階名唱と同時にリズム打ちをする	覚えやすいリズムパターンで容易に取り組む様子みられた
3	指揮者に合わせてミュージックベルを演奏する	階名唱しながら指揮者に集中する様子みられた
4	伴奏（ピアノ）に合わせて演奏	流れに乗って音楽を楽しむ様子うかがえた

七夕ミニコンサートでの選曲では、毎年「たなばたさま」を演奏することが通例であったが、今回はプログラムの中に、ピアノ独奏曲モーツァルト作曲「きらきらぼし変奏曲」が含まれていたことから、子どもたちにクラシック音楽に親しんで欲しいと願い、「きらきらぼし」を選曲した。筆者が実際にこの曲をピアノで演奏すると、担任と子どもたちはテーマから12変奏へと続く曲の構成を知り、この曲の成り立ちについても興味を深め、モチベーション

がアップしたのではないかと推察された。また、「かえるのうた」同様に、一般的に鍵盤ハーモニカにおける導入期の楽曲としても相応しいとの思いからもこの選曲に至った。子どもたちは、お辞儀を含め緊張感を持ちながらも、伸びやかな鳴らし方で、自信を持って演奏に臨んでいたのではないかと見受けられた。また、7月に実施された七夕ミニコンサート本番では、子どもたちはメロディーを暗譜し、一音一音真剣にベルを振り鳴らし、会場からの拍手に達

成感を得られた様子がうかがえた。

初めて人前で発表する機会を持った子どもたちは、ミュージックベル演奏に取り組むプロセスを経験し、練習を積み重ねていく中で、クラスの仲間とともに曲をまとめ、1曲として形になる喜びを味わうことが出来た。また、発表の場では第3者に伝えたという経験は、子どもたちの視野広げ、自信につながったのではないかと推察される。今回の発表ではメロディーラインのみの基礎的なリズムの演奏であったが、「きらきらぼし変奏曲」にみられるように、リズム、拍子、調性、テンポなどを変化させ、メロディーラインのテーマに基づく変奏を楽しむ演奏の可能性も考えられる。それは、より豊かな表現の仕方を発見することに繋がり、音楽の見方の広がりやを体得できることあるのではないだろうかと推察する。これらをふまえ楽曲に対する多角的な見方が必要であると考えられる。



図2 セタミニコンサートでの発表の様子

第6回目では、様々な楽曲の拍子感、調性、リズムの魅力を感じずることをねらいとして展開した。

第1回目から第5回目まで行ったミュージックベル全4曲をメドレーで演奏した。子どもたちは、今までの積み重ねの成果として、全ての曲を暗譜することにも表れていた。これは、音楽を耳で覚えることに加え、ミュージックベルを振ることでリズムを全身で感ずる経験から、身体で感覚的にリズムを捉えることが、暗譜を可能にすることに結び付いているのではないかと推察される。今回の4曲に関しても、練習を少しずつ積み重ねることで、子どもたちへのリズムの理解の定着に繋がったのではないだろうか。また、T園では運動会で楽器演奏、クリスマスコンサートでミュージックベル、生活発表会では鍵盤ハーモニカ、ミュージックベルと人前でのリズム活動の発表の機会が継続されている。これらの機会を見据えても、今回のミュージックベル演奏は、様々なリズム活動に波及効果が期待できるのではないだろうかと考える。更に5歳児の発達として、階名唱の理解が深まることは、音感の育ちに繋がると考える。その意味でもミュージックベルは音感教育の面においても適した保育教材であると推察する。但し、子どもが実際に使用した個々の音数に関しては、表5の通りバラツキがあることが分かった。この点は今後の配慮する視点として配慮することが必要であると考えた。

表5 ミュージックベル演奏における使用音と使用回数

	曲名	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	高いド
1	ちゅうりっぷ	8	9	10		5	2	
2	こいのぼり	7	11	14		11	4	1
3	かえるのうた	9	5	5	5	2	1	
4	きらきらぼし	6	6	8	8	8	4	

IV. 考 察

ミュージックベルの実践を展開した音楽あそびの現状を明らかにした。子どもたちは、リトミックで培われた全身のリズム感を、器楽表現であるミュ

ジックベルの演奏に繋いだことは、子どもたちにとって無理なく円滑で、主体的な活動に導く進め方の事例として捉えることが可能であったと推察した。また、子どもたちが、表現する喜びを技術的側面ばかりでなく、様々な音程の音色に触れ、豊かな

音楽性の育ちにも寄与したと言えるのではないだろうか。また5歳児の発達の見点からも、仲間とともに、集団で取り組む活動は、協調性や責任感など、社会性の育ちにも繋がる機会になったと推測される。

V. まとめと課題

三法令の表現に関する「ねらい」に、(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つに
関しては、ミュージックベルの実践を通して、楽器の持つ音色の美しさや、楽曲をつくり上げる中で味わう音楽の美しさを味わう中で、子どもたちが初めて経験するミュージックベルの音楽を通じた豊かな感性が育まれたのではないかと考える。また「内容」(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。に
関しては、リズム楽器としてのミュージックベルを童謡やクラシック音楽を用いて演奏する過程において、表現することを楽しむ経験に通じたのではないかと考える。また「内容の取り扱い」にある(2) 子どもの自己表現は素朴な形で行われることが多いので、

保育士等はそのような表現を受容し、子ども自身の表現しようとする意欲を受け止めて、子どもが生活の中で子どもらしい様々な表現を楽しむことができるようにする。に関しては、子どもの豊かな表現を育みたいと願う一方で、選曲に関して童謡を扱う場合、メロディーラインのみによる楽曲演奏では、音の使用回数にばらつきが生じてしまうことが課題であると考えられる。今後は更に豊かなハーモニーにも目を向け、メロディー以外にも音を加え、アレンジを試みていきたい。

引用文献

- 岡田泰子(2014) ハンドベル演奏体験における自己変容について 中部学院大学・中部学院大学短期大学部研究紀要 第15巻 35-40
- 高御堂愛子・植田光子・木許 隆他(2018) 楽しい音楽表現 圭文社
- 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領(平成29年公示)